

白雲山医王寺（熊本県八代市）の変遷と建築的特徴について

竹田 誠一朗* 森山 学**

On the transition and architectural characteristics of Io-ji Temple in Yatsushiro City
Seiichiro Takeda*, Manabu Moriyama**

A purpose of this paper is to clarify the architectural characteristics of Io-ji Temple, the Matsui family's place of prayer, in Yatsushiro City. The temple keeps many cultural properties, and the Main hall itself is a cultural properties designated by Yatsushiro City. But there was not an investigation about the architecture until now.

We made the survey drawings, arranged the historic change and compared that with the other prayer's places in Yatsushiro City. The Main hall was built in 1665. It is the biggest and the most prestigious architecture for the place of prayer in Yatsushiro City. Particularly, the gate for the Matsui family exists.

キーワード：医王寺，八代市，近世寺院，祈祷所，平成 28 年熊本地震

Keywords : Io-ji Temple, Yatsushiro City, temple of the Edo era, place of prayer, 2016 Kumamoto earthquakes

1. 緒言

熊本県八代市袋町 5-34 にある白雲山医王寺（図 1）は、真言宗高野山成福寺末寺である。本尊は木造薬師如来立像（国指定重要文化財）である。この本堂は同境内の浄心石塔、庚申碑、青面金剛堂とともに市指定有形文化財である（昭和 40 年 5 月 18 日指定）。また寺院自体が八代城主・松井家や八代神社と関連する、地域の歴史上、重要な寺院である。しかし、図面がなくこれまで十分な建築的調査がされてこなかった。



図 1 境内全景（平成 27 年 4 月 27 日撮影）

表 1 現地調査日

一次調査	平成 27 年 4 月 27 日
実測調査	平成 27 年 9 月 30 日 平成 28 年 1 月 19 日
ヒアリング調査	平成 27 年 9 月 30 日 平成 28 年 1 月 19 日

そこで本研究では医王寺の平面図を作成し、変遷過程も踏まえながら、建築的特徴を明らかにすることを目的とする。また平成 28 年熊本地震の被災状況についても補足する。

研究方法は、実測調査、ヒアリング調査並びに文献調査を行った。現地調査は表 1 の通り、実施した。ヒアリングは住職に対して行った。

2. 来歴

開基、創建年等は不分明であるが、本尊・木造薬師如来立像が室町時代の制作とされることから⁽¹⁾、室町時代に遡ると考えられる。

『肥後國誌』によれば、本来は松江村の財津氏宅にあって、天正期（1573～1593）に小西行長によって破却されたものであり、その跡は「薬師森」と称されたとある⁽²⁾。

破却後の再興については二通りの記述がある。まず『八代郡誌』に記載されている由来書によれば、当山派の山伏・本壽院が慶長期（1596～1615）に再興し、その後、元和 8（1622）年の八代城竣工の際、薬師森を開き、長丁（武家地）を造ったとある⁽³⁾。

一方、『八代事迹略考』（『八代市史』所収）によれば、

* 本科平成 27 年度卒業

** 建築社会デザイン工学科

〒866-8501 熊本県八代市平山新町 2627

Dept. of Architecture and Civil Engineering.

2627 Hirayama-Shinmachi, Yatsushiro-shi, Kumamoto, 866-8501, Japan

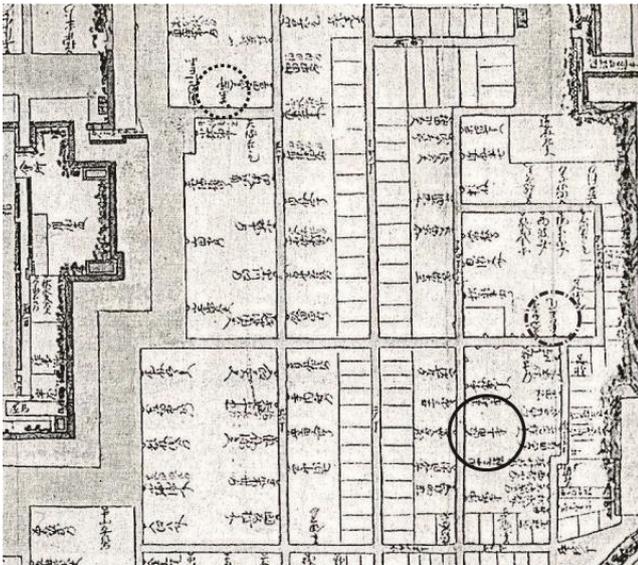


図2 八代町図(宝永期(1704 - 1710))

(出典:参考文献5)

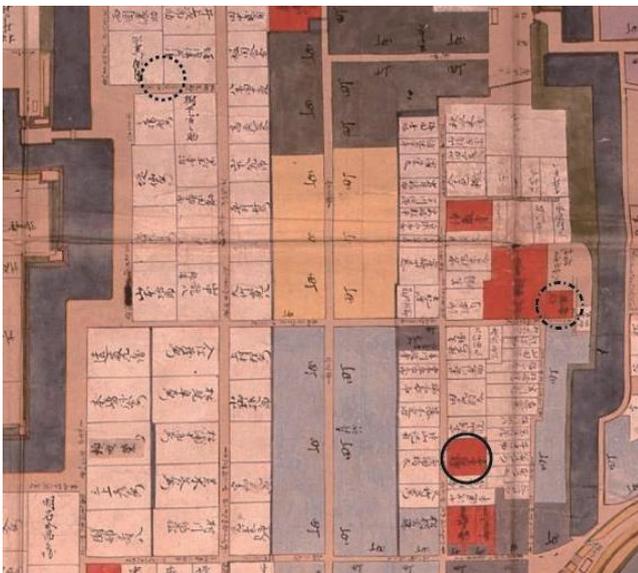


図3 八代城郭全図

(甲斐良郷, 文化8(1811), 財団法人松井文庫所蔵)

城下町をつくる時に、薬師を掘り出して、古跡に小堂をたて仏像を安置して、本壽院が再興した、とある⁽⁴⁾。

両者を比較すると、本壽院が再興したことには変わりはないが、再興時期に違いがある。ただし、いずれにしても八代城築城の時点で、医王寺創建当初の地において、薬師森は開かれ、薬師堂のみあったということになる。

木下潔氏が引用する守山貞雄著『吾が祖杉山院養清法院』によると、寛永9(1632)年頃、細川三斎に追従して来代した杉本院がこの薬師堂に入り、寛永16(1639)年、杉本院が谷町平等寺の再興のため佐敷へ移ってからは、智徳院が相続したとある⁽⁵⁾。

薬師堂の転機は、正保2(1645)年に細川三斎が薨去したのちに訪れる。松井時代の寛文2(1662)年に薬師堂は石原町への移転を仰せつかり移転する。木下氏は、石原町へ移

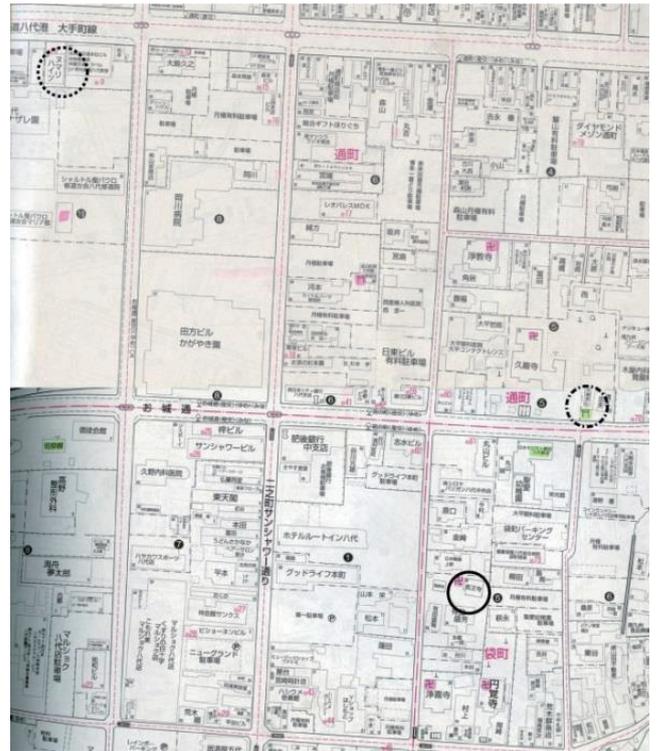


図4 現在の薬師堂跡, 大神宮, 医王寺の位置

(出典:ゼンリン住宅地図2011 熊本県八代市①)

転した薬師堂は、久厳寺東側であると述べ、智徳院亡き後は、無住となり荒廃したと考察している⁽⁵⁾。

これは現在の大神宮の地と考えられる。

この最初の移転間もなく、寛文5(1665)年に松井直之の母崇芳院尼の願いにより、現在地の袋小路に移転し、当山派の山伏寶光院玄竜を住職とし、松井家の祈禱所とした。

後述のように、この際の棟札には「奉再興薬師堂」とあり、いまだ「薬師堂」と称していたことが分かる。由來書によれば、その後、寶光院玄竜が智積院に入り真言僧となったため、真言宗高野山成福寺末寺となった、とあり⁽³⁾、医王寺という古跡の復活として再興したのは、この時とも考えられる。

宝永期(1704~1710)の八代町図(図2)で確認すると、創建の地と想定される箇所に「薬師」の記載があり、この時期に至るまで薬師堂の痕跡が見られる。石原町の現・大神宮の個所に「壽正院」の記載があり、山伏により大神宮が守られていたと考えられる。当地は長らく仙壽院や泉壽院といった山伏に守られてきたようである⁽⁵⁾。また袋小路には「医王寺」の記載がある。

文化8(1811)年の八代城郭全図(図3)では、創建の地にすでに記載はなく、石原町には「神明山伏」と記載され、袋小路には「医王寺」の記載がある。

図4はこれらの箇所を現在の地図に記したものである。図2~4の各々、破線が創建の地、一点鎖線が石原町、実線が袋小路を示している。

近代になると、慶応4(1868)年に明治政府から出された神仏分離令により、妙見宮(現・八代神社)から木造妙見



図5 棟札（平成27年9月30日撮影）



図7 面皮を残す身舎右側柱（平成27年9月30日撮影）



図8 旧縁東石（平成28年1月19日撮影）

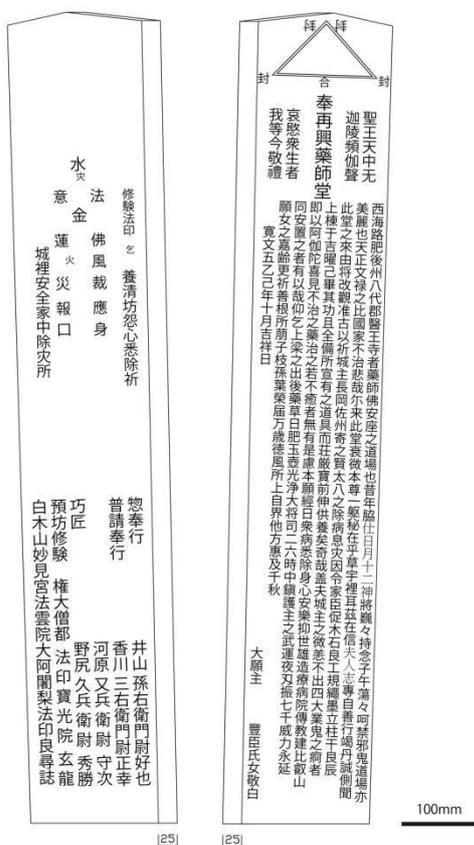


図6 棟札実測図



図9 山門跡の旧布石



図10 二本引きの鴨居

（以上，平成27年9月30日撮影）

「薬師堂」と称していたことが分かる。工匠は野尻久兵衛尉秀勝である。棟札の実測図を図6に示す。

ヒアリングによれば、この時、石原町の建物を規模縮小して移築したと言うことである。わずか3年での移転であり、現・本堂の正面側の桁にほぞ穴の痕跡が見られることから、それも考えられる。

また棟札にある通り、城主自ら祈祷所に取り上げ命じた工事ではあるが、使用している材料は棟札の「木石良工規繩墨立柱」と矛盾し、向拝柱、来迎柱を除く柱の内、5本が面皮を大きく残す柱（図7）となっており、大きな材料を入手できなかった様子が窺える。

次に昭和2（1927）年出版の『八代郡誌』によれば、境内は十七間、十七間半、本堂は二間半四面の茅葺に、一間半方の瓦葺の廊下がつく、という記述がある⁽³⁾。

ここで述べる「四面」が、四方に庇がつくという本来の意味ではなく、建物の4辺を表す意味で用いていると解釈すれば、現在の本堂は幅方向に3.5枚の畳、奥行方向に3.5枚の畳があることから、三間半を「二間半」と間違えて記述したものではないかと考えられる。

この三間半について考察すると、鋸庇を除き、梁間の上限を京間三間とする寛文8年令（寛文8（1668））の上限を超えていることから、この建物はこの法令以前の建物であることが分かるので、寛文5（1665）年建設は間違いがない。

またヒアリングによれば、昭和30（1955）年頃に向拝の階段を緩勾配に改修している。確かに側板下に二つの礎石

菩薩立像、銅像鎮宅靈符三神像、石造仁王像などが移されることになる⁽⁶⁾。

3. 建設と改修の履歴

由来書によれば、「寛永二年，石原町に堂を移申候同年五月，長岡佐渡直之殿御母儀崇芳院殿依御願，袋町今の寺地建立有之」⁽³⁾とある。一方、「奉再興薬師堂」とある棟札（図5）には寛文5（1665）年と記されていることから、由来書の寛永2年と5年の記述は寛文2年と5年の間違いと考えられる。

棟札より現在の本堂は寛文5（1665）年の建設で、当時は



図 11 宝珠の露盤 (平成 27 年 4 月 27 日撮影)

(図 8) が残っているのを確認できる。この礎石は、身舎の柱から内法寸法で 570~580mm の位置にある。この礎石を縁束のものと考えれば、以前は向拝内に縁があり、急勾配の階段が縁にとりついていたと考えられる。また向拝の幅は芯々寸法で 2601mm で一間半弱に相当することから、『八代郡誌』の「廊下」は、向拝を呼称したものと考えられる。廊下のみ瓦とする屋根葺き材の違いも、身舎が茅葺であったとして、向拝の唐破風のみには瓦を使用したということも納得できる。

『八代郡誌』には山門の記載もあり、三尺二間の重門であったと書かれている。残されている門の布石(図 9) の実測結果と比較検討してみるが、ここで書かれている寸法の解釈は難しい。また薬師堂内に保管されているぶどうと三つ笹紋の墓股は、山門の部材だったようだ。

その他の近年の改修について、まず本堂北側の手前一間目の現・仏壇だが、昭和 30 (1955) 年頃に改修されたものであることがヒアリングから分かった。それ以前は、手前半間が出入口で、屋外に 3 段の階段がつき、残り半間は壁だったようである。北側の二間目、三間目の仏壇も、それ以前は押入で長持ちを入れていたそうである。確かに二本引きの鴨居(図 10) が残っていることから、以前は引き違い戸が立てられていたことが分かる。

昭和 54 (1979) 年には天井を張り替え、屋根を本瓦葺から棧瓦葺に葺き替えている。以前は丸瓦に細川家の九曜紋や松井家の三つ笹紋があったようである。現在の宝珠もこの時に新しくされたものであり、露盤に昭和 54 年の銘がある(図 11)。以前の瓦のいくつかが本堂裏に保管されている。この同年、鉄筋コンクリート造の薬師堂が建設されている。

その他、本堂正面の蓐戸が引き分け戸に変更されている。向かって左手には開閉はできないものの蓐戸が立てられたままであり、向かって右手にあった蓐戸は、城主の旧入口門である御輿寄せの裏に収納されている。

床も本来は板敷きであったものが、畳敷きに変更されている。

寛文 5 (1665) 年建設の本堂は、茅葺の身舎、向拝に縁側

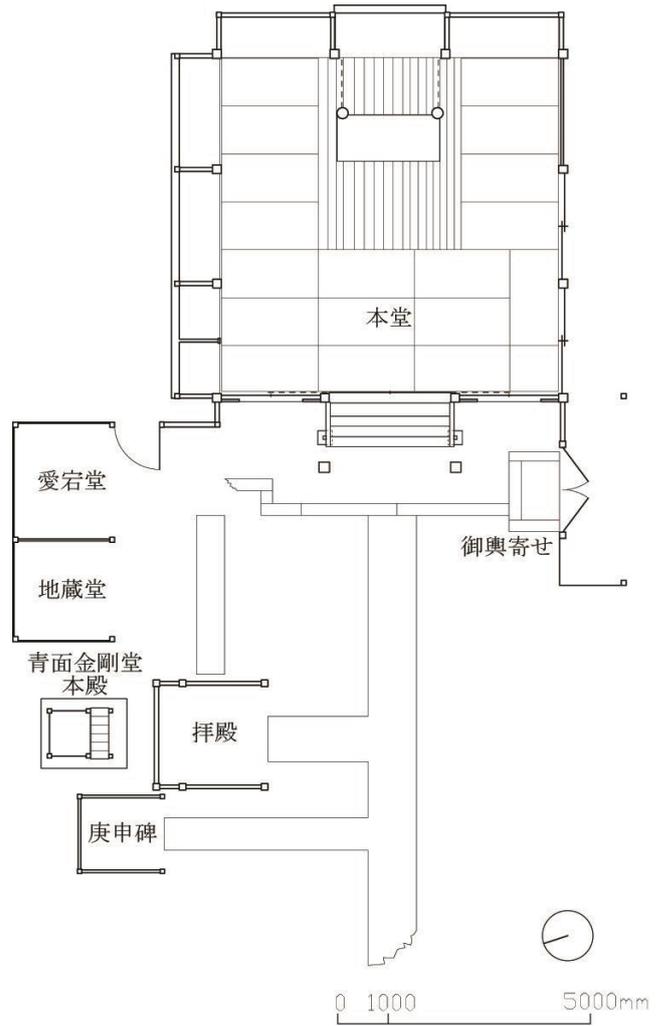


図 12 医王寺の実測平面図

つきのかたちで昭和 2 (1927) 年当時に継承され、その後の改修を経て現在に至っている。屋根は昭和 2 (1927) 年以来、少なくとも 2 度葺き替えられていることが分かった。

4. 現状と建築的特徴(図 12)

4.1 本堂(図 13)

本堂は宝形造向拝つきで、柱間で幅三間奥行三間である。向きは前面道路のある西向きである。屋根は棧瓦葺きで頂部に大きな宝珠がのる。

向拝は大唐破風で、屋根は棧瓦葺きで九曜紋の獅子口と軒止め瓦がのる。兎毛通はぶどう、降懸魚はぶどうの葉の彫刻である。向拝柱の組物は絵様肘木と皿斗つきの巻斗で構成される出三斗である。向拝虹梁の中備は大瓶束笈形となり笈形は波頭である。装飾は大きく重厚である。虹梁に鰐口を吊る(図 14)。

身舎は切目長押、内法長押、内法貫、飛貫、頭貫、台輪で固め、組物は大斗肘木と木鼻、中備を墓股とする。正面の左右脇間に花頭窓がある。

室内(図 15)は、本来板敷きだったものが真壁の隙間に



図 13 本堂正面（平成 27 年 9 月 30 日撮影）



図 16 御輿寄せ（平成 28 年 1 月 19 日撮影）



図 14 向拝（平成 27 年 9 月 30 日撮影）



図 15 本堂内部（平成 27 年 9 月 30 日撮影）

畳寄せを設けて、東側中央に幅 2836mm，奥行 3866mm の内陣の範囲を板間として残し，新たに畳が敷かれている。

天井は格天井である。光明曼荼羅が梵字により墨書きされている。

内陣に仏壇と須弥壇があり，その奥に位牌棚がある。仏壇は来迎柱を丸柱として隅備と彫刻板支輪がある。須弥壇には木造妙見菩薩立像と弘法大師坐像があり，仏壇には胎藏界大日如来坐像と光明曼荼羅と不動明王立像がある。位牌棚の左右には脇仏壇があり，右側には銅像鎮宅靈符三神像，地蔵菩薩像，地蔵菩薩図，木造妙見菩薩立像が置かれ，左側には傳大土と二童子の像が置かれている。

本堂の北側面に沿う仏壇には手前から順に，八臂辨才天女像，白髭稻荷大明神像，水子地蔵，雨宝童子像，文殊菩薩像などが置かれている。

正面の柱間寸法は，左右の脇二間が芯々 2135～2145mm（7.04～7.08 尺），内法 1960～1970mm（6.47～6.5 尺）で，中央一間が芯々 2580mm（8.51 尺），内法 2410mm（7.95 尺）であった。奥行の柱間寸法は，芯々 2280～2300mm（7.52～7.59 尺），内法 2110～2124mm（6.96～7.01 尺）であった。

正面の柱間寸法を合計すると，芯々 6860mm，内法 6680mm となり，奥行の柱間寸法を合計すると，芯々 6861mm，内法 6686mm となる。各々の内法寸法を畳の数 3.5 で割ると，幅が 1908.6mm（6.3 尺），奥行きが 1910.3mm（6.3 尺）となる。このことから，6.3 尺をモジュールとする京間内法制の建築であることが分かる。

枝割では，正面の左右脇が 15 支，奥行が三間とも 16 支となっている。

向拝柱は 203～207mm 角，来迎柱が直径 220mm の丸柱，その他の柱は 150～180mm 角である。

建物の南側の柱が西方（前方）に約 2° 傾き，西側の柱が北側に約 2° 傾いていることから建物全体がねじれていることが分かった。

4.2 御輿寄せ（図 16）

本堂の正面右側には庫裏との間に観音開きの扉があり，屋根がかかる。屋根は目板瓦である。軒は持送り付きの腕木で支える。

これは八代城主・松井家が参拝するときに使用した御輿寄せで，城主を迎える由緒ある寺院であることを証明する貴重な遺構である。

この前に浄心石塔（正平 16（1361））がある。

4.3 その他の堂

本堂の正面左側には地蔵堂・愛宕堂があり，本堂側から日限地蔵，栗島大明神，愛宕権現木像が安置されている。

地蔵堂・愛宕堂に並んで青面金剛堂（足手荒神），庚申碑の覆屋がある。青面金剛堂と庚申碑は市指定有形民俗文化財である。

青面金剛堂は拝殿（図 17）と本殿（図 18）から成る。拝殿は切妻妻入，棧瓦葺きである。組物は出三斗で，正



図17 青面金剛堂拝殿（平成27年9月30日撮影）



図21 石造仁王像（平成27年9月30日撮影）



図18 青面金剛堂本殿（平成27年9月30日撮影）



図19 拝殿の臺股（平成27年9月30日撮影）



図20 拝殿に残る蒔戸金具（平成28年1月19日撮影）

面虹梁の木鼻は象鼻，中備は八代神社の社紋の丸に二引き両紋の臺股である（図19）．部材の風化は激しいが，特に臺股は規模に対し，大きく印象的である．八代神社の社紋がみられることから，神仏分離時に八代神社の建物を移築した，あるいは部材を転用した可能性が考えられる．

拝殿の規模は梁間一間桁行二間である．梁間は芯々で2065mm（6.8尺），内法で1935mm（6.4尺），桁行は手前の一間が芯々で1624mm（5.4尺），内法で1494mm（4.9尺），奥の間が芯々で515mm（1.7尺），内法で385mm（1.3尺），全体で芯々2139mm（7.1尺），内法2009mm（6.5尺）である．

正面虹梁には蒔戸の金具が残存しており（図20），ヒアリングからかつて蒔戸があったことを確認した．以前はこの蒔戸を閉鎖し，通常の入口を右側面にとっていたようである．現在は両側面に腰壁がつくが，本堂から右側面へ続くモルタル製延段は残されている．

本殿は基壇上に乗る一間社流造の小社である．木製亀腹の上に土台をのせ，その上に角柱がのり一枚板の板壁とする．切目長押，内法長押には鉄製の飾り金物が用いられている．軒止め瓦は三つ笹紋である．

庚申碑の祠から離れて前面道路側に観喜天堂がある．この観喜天堂，庚申碑の覆屋，地藏堂・愛宕堂が，ヒアリングによれば昭和50年代の建築である．改築前の観喜天堂は現在より大きく，山門との間に東屋と井戸があったようだ．

境内中央より前面道路寄りに鉄筋コンクリート造の薬師堂が南向きで建つ．

本堂への参道は，以前は山門から斜め方向に入り屈折して本堂へ向かっていたが，現在は山門がなくなり，薬師堂が建てられたことで薬師堂の犬走りから本堂へ直進するのみとなった．この参道両脇に八代神社から移された一対の石造仁王像（延宝3（1645）奉納，図21）が立っている．

5. 八代市内の他の祈祷所寺院との比較

5.1 金立院（図22）

正保3（1646）年，松井興長の八代入城時に，現在地である春日神社の北隣に移転し，松井家の祈祷所となった⁽⁵⁾．

医王寺と同じ三間四方の宝形造で，棧瓦葺きの屋根の頂部に宝珠がのる．向拝は片流れ屋根で棧瓦葺きである．



図 22 金立院（平成 28 年 5 月 5 日撮影）



図 23 般若院（平成 28 年 5 月 4 日撮影）



図 24 安楽院（平成 23 年 9 月 21 日撮影）



図 25 片野川妙見堂・薬師堂（平成 23 年 12 月 26 日撮影）

5.2 般若院（図 23）

寛永 9（1632）年，細川三斎の八代入城時に創建した細川家の祈禱所である。『八代事迹略考』では元文 5（1740）年に清瀧権現堂を勧請し，以来真言宗になったとある⁽⁵⁾。

建築は正堂と礼堂を接続させている。



図 26 玉泉寺（平成 23 年 10 月 28 日撮影）

5.3 安楽院（図 24）

天正期（1573～1593）に創建された平山城主・桑原氏の祈禱所，中光寺であったが，小西行長代に破却され，加藤清正代に安楽院として再興された⁽⁷⁾。

現在の建物（慶応元（1865）改築）は，三間四方の宝形造，椼瓦葺きである。向拝は片流れ屋根である。

5.4 片野川妙見社（北方宮）・薬師堂（図 25）

片野川妙見堂と薬師堂は，相良氏の祈禱所であり八代鎮護の寺院であった成願寺（永正 10（1513）創建）の，北東守護の鎮守の跡である。小西行長代に破却されている⁽⁸⁾。

片野川妙見堂は本殿と拝殿が一体の小社である。

薬師堂は三間四方の入母屋造妻入で，木鼻や組物は無い。

5.5 玉泉寺（図 26）

承応・承仁期（1171～1174）に平重盛が創建した祈禱所で，律宗であった。天正期（1573～1593）に相良氏の祈禱所になり，小西行長代に衰退した。慶長 6（1601）年に草堂，延宝 6（1678）年に仏殿，元禄 3（1690）年に僧舎を建て復興した。元禄 11（1698）年に臨濟宗となり現在に至る。

仏殿はその後，天保 5（1834）年に改築されている⁽⁹⁾。三間四方の宝形造，椼瓦葺きで，向拝は片流れ屋根である。

5.6 比較

医王寺を八代市内の現存する他の城主等の祈禱所と比較すると，三間四方の宝形造と同形式が多いが，医王寺の規模が一番大きく，唯一，向拝が大唐破風で，身舎，向拝ともに組物が多様に施されている。

一方，大唐破風のある寺院本堂は，八代市内の例では他に，松井家菩提所・春光寺⁽¹⁰⁾（延宝 5（1677）移転，明治 20（1887）改築）のみである。大唐破風を本玄関とする方丈風本堂で，その墓股には松井家の三つ笹紋がつく。

6. 熊本地震による影響

八代市内歴史的建造物の平成 28 年熊本地震の影響を平成 28 年 5 月 2～25 日に外観目視により悉皆調査した。医王寺は 5 月 5，7 日に実施した。

本堂身舎の正面側柱は左へ 1/24，前へ 1/40，向拝柱も左へ 1/24 傾いていた。建物自体も左に 1cm 程度移動していた。向拝の唐破風の破風板が拝みの個所ですれてはいるが，



図 27 本堂の傾き (平成 28 年 5 月 5 日撮影)



図 28 花頭窓付近の壁の剥落 (平成 28 年 5 月 5 日撮影)



図 29 御輿寄せの傾き (平成 28 年 5 月 5 日撮影)

これは以前からである。以前からの建物のねじれが大きくなっている(図 27)。身舎脇間の花頭窓周りで漆喰壁に剥落、クラックが見られた(図 28)。

御輿寄せも西へ傾く(図 29)。漆喰壁にも浮き、クラックがあった。持送りが外れているが、以前からである。

青面金剛堂本殿の基壇石垣の後方中央あたりが膨らみ、三つの角でクラックがあった。この基壇上の建物が反時計回り方向に回転してずれていた(図 30)。

本殿背面では、右の柱が割れ、床下格子が外れていた。

7. まとめ

医王寺の現状の実測図面を作成し、以下を明らかにした。

①医王寺の前身の薬師堂の移転状況を整理した。



図 30 青面金剛堂本殿の回転 (平成 28 年 5 月 5 日撮影)

- ②由来書の寛永 2, 5 年の記述は寛文 2, 5 年の誤りである。
- ③現在の本堂は、寛文 5 年の建築であることが棟札並びに寛文 8 年令との関連から確認した。
- ④昭和 2 年以降の改修状況を明らかにした。
- ⑤本堂は京間内法制である。
- ⑥城主・松井家の祈禱所であるが、柱 5 本には面皮がつき、十分な大きさの部材を使用していなかった。
- ⑦城主を迎える貴重な遺構・御輿寄せが残る。
- ⑧医王寺は他の城主等の祈禱所と比較すると規模が一番大きく、格式が最も高いものである。
- ⑨大唐破風のある寺院本堂は八代市内では医王寺の他には、松井家菩提所・春光寺のみである。
- ⑩青面金剛堂拝殿に八代神社社紋があることから、神仏分離時の移築、転用の可能性を示した。

(平成 28 年 9 月 23 日受付)

(平成 28 年 12 月 7 日受理)

参考文献

- (1) 八代市立博物館未来の森ミュージアム；八代市内主要寺社 歴史資料調査報告書二(球磨川・前川以南城下町周辺), p.94, 八代市立博物館未来の森ミュージアム, (1995).
- (2) 後藤是山編；肥後國誌, 下巻, p.277, 青潮社, (1916), (成瀬久敬(1728), 森本一瑞(1772), 水島貫之・佐々豊水(1884)の増補改訂).
- (3) 熊本県教育会・石川愛郷；八代郡誌, pp.503-508, 臨川書店, (1927).
- (4) 蓑田田鶴男；八代市史, 第四巻, pp.157-158, 八代市教育委員会, (1974).
- (5) 木下潔；江戸時代の八代—八代城下町の変遷と寺社考一, 私家版, pp.37-40, pp.126-127, pp.131-137, (2009).
- (6) 八代市教育委員会；八代市文化財調査報告集 第 43 集 八代妙見祭, p.94, 八代市教育委員会, (2010).
- (7) 蓑田田鶴男・宮島巧；高田の歴史, pp.55-56, 八代市高田公民館, (1961).
- (8) 蓑田田鶴男；八代市史, 第三巻, pp.290-292, 八代市教育委員会, (1972).
- (9) 熊本県教育委員会編監；玉泉寺, p.15, p.93, 熊本県文化財保護協会, (1980).
- (10) 森山学・原田聡明・石本和真；八代市内の寺院である安養寺, 本成寺, 春光寺の建築的特徴, 熊本高等専門学校 研究紀要 第 5 号, p.79, 熊本高等専門学校, (2014).